十七文字の抒情詩

今年初めての十七文字・・どうぞ宜しくお願いします。
今年の冬は例年よりずっと暖かく、今のところ雪も数えるほどしか降っていません。
二月に入って急激な寒波がやってこなければ良いのですが・・
ただ、暖冬もここまでくると、自然がどこか壊れているようで、怖くもなります。
こんな中で冬の句を詠むというのはなかなか難しいですね。
俳句は感覚で詠むのが良いような気がします。
雪が降っていなくても降っているような感覚・・
それでも良いのではないかな・・と思います。
健さんとうさおさん、今回も投句ありがとうございました。

まず健さんの句です。

住み慣れし街並なれど初景色

見慣れた街並も年があらたまると何となく違った感じに見えます。良い所に目をつけて詠んでいらっしゃいますね。ただ、なれど・・が少し説明的な感じもします。
＊住み慣れし我が街並や初景色

竹ひごと和紙のヒコーキ枯野原

竹ひごと和紙のヒコーキが飛んでいた・・ただそれだけの事なのに
季語の枯野原があるだけで、景色が明確に見えてきます。

しぐるるや扉の厚きショット・バー

良い句ですね・・特に気負う言葉でもなくさりげない句なのですが、中七の扉の厚き・・が季語のしぐるるを受けて、作者の心の中まで感じさせてくれます。好きな句です。

続いてうさおさんの句です

野も枯れて小田原城址透けて見ゆ

情景を全部説明しようとすると肝心なものが薄くなってしまいます。
この場合野が枯れる事に重点を置きたいので、もったいないけれど小田原はカットしましょう。
かな・・と結んで、枯野を強調すると句がはっきりしてきます。
＊城跡の遥かに透ける枯野かな

都会では見ることも無きからす瓜

からす瓜を見て珍しい・・と感じられた句なのでしょうか？
少し意味が違ってくるかもわかりませんが、　＊喧騒を離れ離れて烏瓜

玄関の脇に黄色い蔦絡み

玄関の脇に黄色い蔦が絡んでいました。という情況説明だけになっているので少し整理して、
詠みたいものに重点を置きましょう。蔦だけに焦点をあてて詠むと蔦の様子がよく見えてきますよ。
＊淡き色壁に絡ませ蔦かづら

朝霞み富士と大山月残り

朝霞（霞）は春の季語なので、月を残しましょう。「月冴ゆる」は冬の季語です。
＊大山に富士に残りし月冴ゆる

歩に連れて同行二人の鰯雲

歩に連れて・・が少しわかりにくいです。中七で二人連れだとわかるので
省略できるところは省略して、せっかくの季語を生かしましょう。

＊いわしぐも行き先決めぬ二人連れ
＊歩の幅は同じ二人や鰯雲
こんな感じにすると鰯雲がはっきりしてきます。

俳句は十七文字・・世界で一番短い文学です。
その中にあれもこれも・・と考えてしまいますが、嬉しい事に季語という
便利なものがあって、その季語で感情の半分は伝わるのです。
あとはその季語といかに響きあう言葉を使うか・・季語を説明するのでは
なくなるほど・・と説得力のある、しかもわかりやすい言葉をもってくる。
そう考えて組み立てていくのは結構楽しいものなのです。

久保田万太郎は作家ですが、俳人としてもとても魅力的な句を詠んでいます。
淋しい晩年（でも世話をしてくれる女性がいて考えようによっては幸せですが）
の句に私の好きな句がたくさんあります。

この恋よおもひきるべきさくらんぼ

おもいきるべきと一旦切っておいて季語のさくらんぼ。
相手に対する思いをぐんと強く感じます。

まゆ玉や一度こじれし夫婦仲

妻を不幸にしてしまった万太郎の思いが一見まったく関係ないように思える
季語まゆ玉に哀しくつまっているように私には思えるのです。

雪つもりつもりつもりて哀しさよ

中七のリフレインが効果的。季語をより鮮明にそして下五の哀しさにも充分
効いています。

湯豆腐やいのちのはてのうすあかり

最晩年の句ずっと一緒にいた女性を亡くした後詠んだ句ですが、湯豆腐という
季語がこんなに哀しいはかないものになるなんて、すごい・・と思います
ふるふる震える湯豆腐のはかない白。それをつついている淋しい男の背中。
万太郎の句で最も好きな句。

健さんもうさおさんもちょっとした場所で俳句を浮かべて
いらっしゃるようです。
これからは、季語とのかね合い、季語をいかに効果的に
使うかという事も頭において作句されるともっともっと良い句が
生まれると思います。次回の投句楽しみにしています。

万太郎いとしいとしと初明り

亥の年の男の一途鬼やらひ　ゆうこ